毎日

大岡　玲　評

イラン人は神の国イランをどう考えているか

レイラ・アーザム・ザンギャネー編（草思社・1890円）

「私たちイラン人は、シャハラザードが語る有名な『千夜一夜物語』の世界と、カラスのように真っ黒な装いの躁病の妻をもつ髭面テロリストの世界のあいだのどこかに位置付けられ――実際には無造作に突っこまれ――ている」

本書に登場する作家でグラフィックアーティストでもあるマルジャン・サトラピーは、イランに対する欧米の見方の紋切り型をこう表現している。石油という最重要資源のひとつを媒介にしてかの国との長いつきあいがあるわが日本においても、たぶん事情はそう変わらないはずだ。大多数の日本人にとって、高価なペルシア絨毯と「悪の枢軸」の間に横たわる深くて広い裂け目を埋めるのは、容易なことではない。

非イスラム圏の人々が、単なるエグゾティシズムによる誤解以上の不可解さをイランに対して抱くようになった最大の原因は、やはりホメイニー師の主導によって起きた一九七九年のイスラーム革命だろう。莫大な石油収入を背景に圧制的に西欧型の近代化を推進したパフラヴィー国王を打倒したこの革命以後、イランはイスラームの原点復帰を旗印に保守化した。女性の地位はいちじるしく下落し、言論や表現の自由は厳しく制限される。民主化を夢見て革命に荷担した人々にとっては、予想外の成り行きだったにちがいない。そうした流れの果てに、最近ではホロコースト否認説を唱え、核開発を振り回す超保守派大統領が登場してきて、欧米諸国を震えあがらせているわけである。

しかし、イランの人々を強硬な原理主義者だ、とひとくくりにするのは、もちろん常識的に考えて馬鹿げている。もしそう見えるとしたら、それは充分な情報が与えられないために、私たちの視線が偏ってしまっているからだ。本書の編著者であるレイラ・アーザム・ザンギャネーは、「イラン人の政治的、文化的生活の多面的な現実」を「細部まで見渡せるパノラマ」として提供するために、「イランのもっともすぐれた作家、芸術家たち」に「多彩な物語やエッセイを」書いてもらう計画を立てた。その成果が、この本なのである。日本でも著名な映画監督アッバース・キャーロスタミーをはじめとして、今世界で活躍するイラン出身の表現者たちが「検閲なしで」書き記し、話している内容には、目を瞠らされると同時に深く納得させられる。

目を瞠る多面的な政治・文化の現実

革命後、女性の権利が次々に剝奪されていく状況を、ショーウィンドーに飾られたマネキンが人間的属性を奪われた形に変化していく過程を描くことであざやかに具象化し、それにもかかわらずイランの女性たちが粘り強く個性と自由を取り戻す道を模索していると告げる人権派弁護士メーランギーズ・カール。

宗教学者レザー・アスランは、イランが「神政国」ではなく「坊さん統治国」であり、しかもその〝坊さん〟、すなわち宗教指導者を意味する「アホンド」という言葉が、テヘランでは侮蔑語として広く通用していることを明かす。

自由な性的交渉などご法度、とりわけその種の事柄では女性が過酷な刑罰を受けるはずのイランで、ひそかに広がるアンダーグラウンドのセックスパーティー。ここには、作家のサーラール・アブドーが案内してくれる。

なにより心うたれるのは、人間の想像力と自由への意志に寄せる書き手たちのゆるぎない信頼だ。「いかなるタイプの圧制者も私たちがもっとも大切にしているもの」、「『想像力の共和国』」「を奪うことはできません」（『テヘランでロリータを読む』の著者アーザル・ナフィーシー）。

（白須英子訳）

今週の執筆者

「この人・この3冊」は、作家の水木楊さん。著書に『青いあひる』（文藝春秋）など。五味文彦さんは放送大教授（日本中世史）▽小島ゆかりさんは歌人▽藤森照信さんは東大教授（建築史）▽山内昌之さんは東大教授（国際関係史）▽湯川豊さんは東海大教授（文芸）▽大岡玲さんは作家・東京経済大教授（日本文学）。